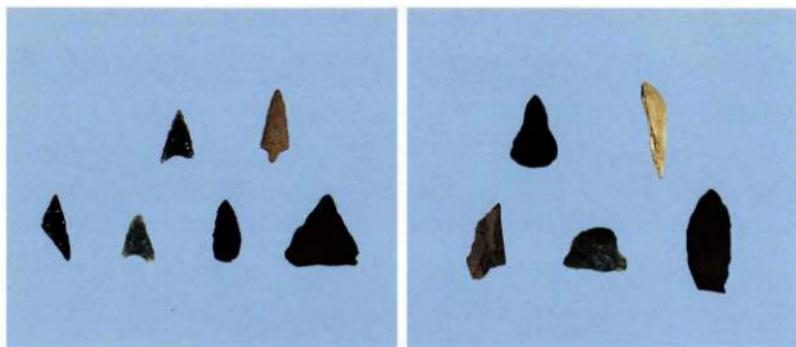


# 茶磨山遺跡

緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2000

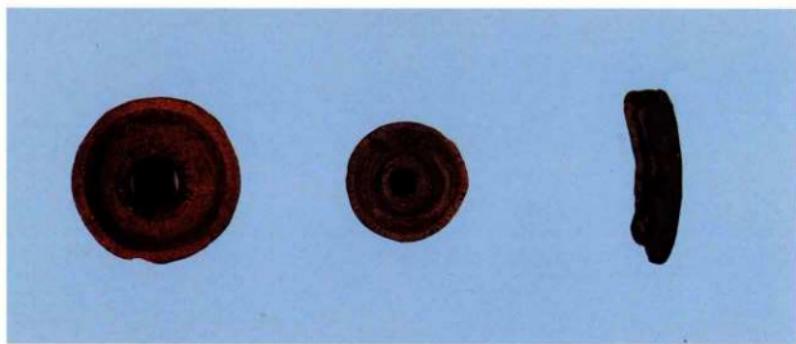
長野県上水内郡牟礼村教育委員会



石鑿・小型石斧等



器 台



土製耳飾

## 序

牛札村には、道路の開発等に伴う発掘調査により、多くの遺跡・遺物が出土しています。その中には学術的に注目されるものが多く見られています。

昭和54年県営圃場整備に伴い明專寺遺跡と共に茶磨山遺跡の調査が行われ、たくさんの遺物が出土しました。ちやうさてんじ縄文時代の指標となっている土器や各種の石器が多量に出土し、以降、晩期の代表的遺跡としてよく知られるようになってきました。

今回、村道整備に伴い茶磨山遺跡の南端を調査しました。前回の北側調査時の膨大な遺物の量には到底及びませんでしたが、平安時代の土器も少量出土し、その時代の生活を伺い知ることができそうです。なお、残念ながら今回は分かりませんでしたので、前回多量に出土した土器や石器を使用した人々の住まいが何処に在ったかについては今後の課題となります。

村では、発掘された埋蔵文化財を始め、村の貴重な資料を後世に遺すべく「むれ歴史ふれあい館」を建設いたしました。本書の作成を契機に埋蔵文化財包蔵地の周知徹底を図るとともに、関係機関をはじめ、広く村民の皆さんにも文化財愛護の思想を普及し、先人の残された貴重な文化財を破壊から保護しようと考えるものであります。本書が十分に活用されることを願っております。

終わりに、調査から本書作成にいたるまで御協力頂いた文化財調査委員会をはじめ、関係された皆様に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月31日

牛札村教育委員会  
教育長 山田 邦彦

## 例　　言

- 1 本書は、「緊急地方道整備事業」に伴い平成8年に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は牛込村教育委員会が担当した。
- 3 調査記録、および調査によって得られた資料は牛込村教育委員会で保管している。遺跡の略記号は「C U」である。
- 4 本書は「茶磨山遺跡」の報告書である。「ちゃうすやま遺跡」といい、1980年に発行された報告書『明專寺・茶臼山遺跡』<sup>5</sup>の茶臼山遺跡と同じである。遺跡名については茶臼山か茶磨山かかねてより懸案となっていた。小字名は「茶磨山」であるが、通常は一般的に茶臼山を使用している。これまで遺跡名も茶臼山遺跡でとおってきた。しかし地元では「茶磨山なんだから直すべきだ」との声が高く、折しも村内の遺跡分布調査とかさなって遺跡見直しの好機となり改名することとした。
- 5 遺物の整理、拓本、実測、トレースは、富岡鹿子、柳沢まち子、横山かよ子が、石器実測は山本賢司が行った。
- 6 本書の執筆・編集は主として横山かよ子が行ったが、第2章は矢野恒雄氏に玉稿を賜った。記して、感謝を申し上げたい。
- 7 遺構の測量は綴写真測図研究所に委託し、コーディックシステムにより1:20の縮尺で基本図を作成した。本書では、それを基に作図したが縮尺は各々記してある。
- 8 本書作成にあたって笹沢浩、中村由克、綿田弘実の各氏にご指導をいただいた。記して感謝を申し上げたい。

# 目 次

口 紙	
序	
例 言	
目 次	
第1章 調査経過.....	1
第1節 調査に至る経過.....	1
第2節 調査の概要.....	1
第2章 茶磨山遺跡周辺の環境.....	2
第1節 地理的環境.....	2
第2節 歴史的環境.....	4
第3章 調査結果.....	9
第1節 A区遺構・遺物.....	9
第2節 B区遺構・遺物.....	10
第4章 まとめ.....	13

## 写真図版

## 抄 錄

# 挿図目次

第1図 野村上地区を中心とした全図.....	2	第10図 B区全体図.....	17
第2図 茶磨山組小字図.....	3	第11図 B区出土土器.....	18
第3図 明治期字茶磨山全図.....	3	第12図 石器実測図.....	19
第4図 調査地位置図.....	8	第13図 石器実測図.....	20
第5図 調査地周辺の地形.....	8	第14図 土器拓影.....	21
第6図 遺跡地形図.....	13	第15図 土器拓影.....	22
第7図 茶磨山の東側裾より出土.....	14	第16図 土器拓影.....	23
第8図 A区全体図.....	16	第17図 B区出土 土製耳飾.....	23
第9図 集石遺構実測図.....	16	第18図 B区出土 寛永通宝.....	23

# 第1章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

茶磨山遺跡は牛込村大字川上1,666番地に所在する。川の浸食作用でできた独立した小丘陵全体をいう。この遺跡の北東側は昭和54年に圃場整備事業に伴って発掘調査が行われた。今回は牛込村建設課の地方道整備事業に伴い、教育委員会で調査を行った。建設課との協議を重ね平成8年8月5日に試掘確認調査を行った。その結果、遺構は確認できなかったが遺物は少量ながら出土したので本調査を実施することにし、8月30日より開始した。

## 第2節 調査の概要

1. 発掘期間 平成8年8月30日～平成8年10月21日
2. 調査体制  
調査指導者 矢野恒雄 原田茂 青山紫朗 丸山久 丸山義一  
高野永篤 北條正夫（以上 村文化財調査委員）
  
- 教育委員会事務局 教育長 山田邦彦  
総務教育課長 金井元司  
同主任 榎部史子  
同主任 横山かよ子（調査係）
  
- 作業協力者 井沢豊蔵 小林和子 高野芳美 高野きくよ 竹花民夫  
寺島尊夫 富岡鹿子 宮本五一郎 横山正吉
  
- 調査協力者 牛込村建設課長 石川功  
同係長 片山哲夫  
同 広田勝己

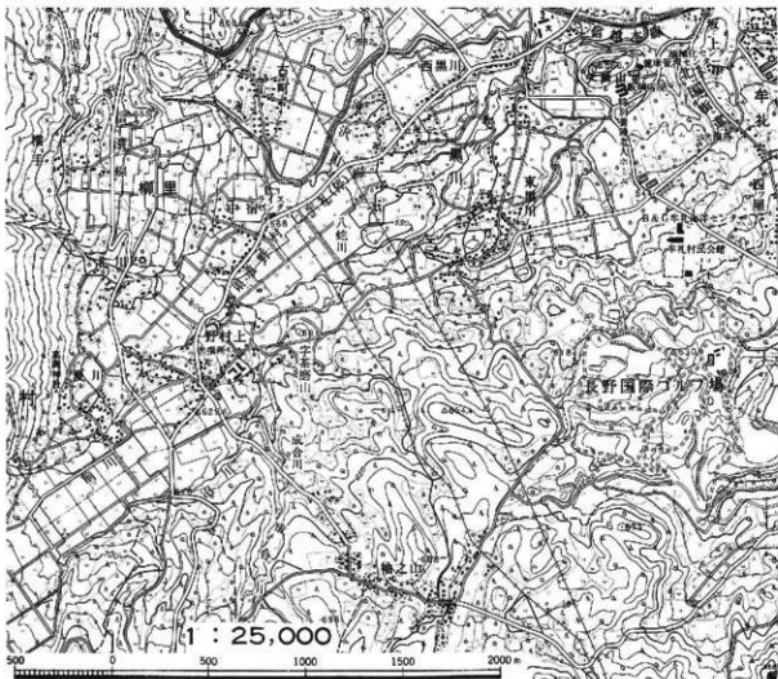
## 第2章 茶磨山遺跡周辺の環境

### 第1節 地理的環境

茶磨山集落は、牟礼村大字川上字茶磨山にちなんだ茶磨山祖で、現在戸数14戸程の小聚落である。明治7年(1874)自然村茶磨山村が野村上村に編入され、字茶磨山となった。集落名のおこりとされる茶磨山の山は直径約150mの小丘で、その形状が抹茶臼に似ていることが山の地名とされている。即ち上白と下白との段差のある地形である。これは山の北側を流れる八蛇川水系の侵食によるものか、または人為的に築造されたものか。人為



写真1 字茶磨山の茶磨山



第1図 野村上地区を中心とした全図



写真2 馬鍛石の巨石

的な築造であるとすると、古代・中世初期の山城の跡  
かも知れない（写真1・第1図参照）。

茶磨山集落の区域は、茶磨山・平石・東窟・前窟・  
茨畦の五つの小字内である。集落名が小字名にあるの  
は村内でも珍しい。宅地が宇茶磨山に集中して立地し  
ているからであろう（第2図参照）。

集落名については、周辺の住民は昔から一般に「馬鍛石」と呼んでいる。その根拠はすぐ近くの字平石の  
水田中に、表面に馬鍛で田をかいた時につく筋が何本もついた巨石（地上部周囲12m高さ3m）  
があり、それを馬鍛石と呼ぶからとされている（写真2参照）。この何本もの線については從来の郷土史家は  
氷河の擦痕説を唱えたが、信大の元助教授赤羽貞幸氏は「古飯糰大山の大砂砾堆積物」と説明された。この  
ことを裏付けるが如く宇茶磨山の伊藤基家の西側に高さ3m余、遼り10m余もある大岩石、またその近く松井政春家の屋敷の一隅にも高さ3m程の岩石がある。

当集落から袖之山集落に通ずる旧道端の字舟石には、その名の如く舟に似た長さ15m幅4m程の巨石に、  
二条の割れ目が入った通称舟

石がある。この割れ目にたま  
った水を子供が病気にかかっ  
た時、お賽銭を上げて呑むと  
すぐ治るとの伝承がある有名  
な石である。何にしても茶  
磨山集落周辺には巨石が多く  
散在している地形である。

水田地帯は八蛇川の支流成  
合川渓谷（第1図参照）の沢  
田や、大字袖之山字御堂久保  
(第2図参照)方面からの沢  
筋が大部分である。交通上は  
東黒川方面から当地を経て戸  
隠方面に達する戸隠街道筋



第2図 茶磨山組小字図



第3図 明治期宇茶磨山全図

(東黒川良松寺前の庚申塔に「西戸隱道万延元庚申季講中」)である。そして塩沢峠から袖之山を経て飯綱山麓に達する山道との交叉点でもある。一説には前述の馬銀石集落名語源説には「馬返し」説もある。里の善光寺平の百姓が入会山の飯綱山麓でドウノケ(牛馬の飼料草)等の馬草を刈って、この地で干して軽くなつたのを、再び馬を里から引いて来て「馬を返して」家に運搬するので、馬返しと呼ぶようになったとの伝承もある。近くに現在大字黒川地区ではあるが刈った草を干すという字荷干山がある。

## 第2節 歴史的環境

### 1. 沿革

『長野県町村誌』の川上村の項に「明暦二年(1656)野村上村を要いて茶磨山村を置き……」とあるのが茶磨山の初出である。野村上村については、嘉暦四年(1329)「幕府、源氏社上社五月会御射山頭役等ノ結番ヲ定メ、併セテ同社造営所役ヲ信濃郡ニ課ス」の文書(『信濃史料』第五卷)に「左頭、大田庄内赤治郷豈後大夫判官、小玉郷地頭等、付同庄内野村上・今井……」とあり、時代は鎌倉の後期である。ところが最近この文書の解説について「野村・上今井」と読む方が正しいとの説が登場した。「むれ歴史ふれあい館」学芸員の小山丈夫氏は、時代は若干下がるが天正10年(1582)上杉景勝が鳴津淡路守に宛てた文書に「野村」が明記してあることを公表された。次にその関係部分を記す(「むれ歴史ふれあい館」にコピーが展示してある)。

#### 地方之覚

參百貫文 若槻之内東條

五拾貫文 仲俣高梨領小島分

武百貫文 鳴津領吉村

(中略)

百貫文 鳴津領平出

千貫文 同領黒川郷

五百貫文 同領牛札

參百貫文 同領野村

參百貫文 同領小玉

參百貫文 同領古間

七百貫門 同領福王寺

(中略)

以上

天正十年七月十三日 上杉景勝(朱印)

(忠直)  
鳴津淡路守殿

(埼玉県立文書館石垣家文書16)

天正10年は嘉暦4年より253年後になるが、上の史料により野村の存在は否定できない。筆者は以前同地区の研究者故井沢信雄氏から「野村と呼ばれる古い村が野村上集落の東の下方にあった」との言葉を聞いたことがある。現在旧野村上神社(宇中町の公民館)は、野村上集落の下方低地に立地している。氏神様が集落より低い土地にあることは考えられない。これは旧野村上神社より東方の低地にかつて野村の集落が存在したことを実証する唯一の証左である。

現在、旧野村上神社の下方は字宮下で、それに統いて東方に字明尊寺がある(第2図参照)。その字名は慶

長11年（1606）信濃町柏原の真宗西本願寺末明專寺が、この地に移り庵室を建てたのにちなんで後世につけた地名である〔明專寺の歴史〕。おそらくこの字宮下と字明專寺を中心とした地域が、古くは野村と呼称されたものと推考される。字明專寺地籍は、八蛇川と山人川（今、成合川と呼ぶ）の二川に挟まれた要害の地でもある。そのためか木曾義仲が北陸に進出する際、一時ここに陣し野村上神社境内の楓の大木に駒をつけないだとの伝承が残っている。以前概の大古木があった〔高岡村のあゆみ〕。

茶磨山集落は地形的には野村の中心地よりやや高地なので、水害にもあわず残存したものであろう。そして茶磨山の山こそ、前述したように野村の要塞（山城）として活用された遺跡とも考えられる。地域の旧家松井政春家の仏壇の御掛軸の御裏書に「本願寺釋宣如（花押）」の墨書がわざかに読み取れる。宣如は真宗東本願寺系で元和期（1615から1623）前後に登場する上人である。元和は慶長11年（1606）明專寺がこの地に移寺して来た直後である。松井政春家は松井氏の總本家と言われ、最初は宇平石の山際の宇御堂久保へ通ずる道筋に居住し、旧茶磨山のお宮（神明社）は星敷神であったとの伝承がある（第2図参照）。ちなみに明治四年（1871）の「神社明細帳原本」（県立歴史館蔵）には、神明社として次のように野村上村と茶磨山村から長野県に届書が提出されている。

神明社 但し式外

- 一、本社間数 表式間 橫八尺
- 一、鳥居地之間 六尺 但し勧請年記不分明
- 一、祭日 年々三月八日
- 一、社地間数 長六間 橫五間 高地
- 一、社領 現米高六升
- 一、當村之儀者御高地ニ而、村持自普請ニ仕候。
- 一、神職之者無御座候。

右之通相違無御座候

兼帶 野村上村  
茶磨山村  
組頭 井沢津右エ門㊞  
名主 井沢真兵衛㊞

長野県御役所

神明社は明治41年（1908）茶磨山組から高岡神社に合併し、現在その跡地だけが山林中にかすかに微地形が残っている。まさにこの地点が茶磨山集落発祥の地に比定される可能性が高い。前出の文書には「神職之者無御座候」と神社専属の神主がないとなっている。しかし松井家には昔の神主菱東の神が保存されていることからすると、同家が氏の長として祭祀を担当したことがうかがわれる。まさに一族の屋敷神が集落の氏神に発展した一例とも言えよう。

正徳3年（1713）の明細帳では高持百姓が8軒、水呑百姓が3軒で合計11軒、その人口は34人である。從って1軒当たり平均人数は約3人で極めて少ない。後述するが、延宝8年（1680）の推定戸数7軒に対し、33年後の正徳3年には4軒増え、その増加率が高い。さらに第3図の「明治期宇茶磨山全図」では、宅地数が16筆、即ち16軒と考えられ集落の発展の様相がうかがえる。

茶磨山の集落名について一般的には馬糞石と呼ばれていると前項の地理的環境で述べたが、文献に登場するのは寛文8年（1668）でかなり古い。『長野県史』近世史料編第七卷〔〕には、寛文八年五月水内郡長沼領等村々・幕府領新田百姓入会山出入訴訟（長沼領）と題する中に「一、まんく王石新田同所林御座候」と、

第1表 延宝八年茶磨山新田方反別

等級 耕地	下 田			下 下 田			合 計					
	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩
川ばた		2	29			4	13			7	12	
ひら石		2	13							2	13	
さり		1	17			1	4			2	21	
三枚をき		6	26							6	26	
つくり田		5	15							5	15	
石原田						1	15			1	15	
まんく八石					2	7	15		2	7	15	
せぎ下		3	3			1	20			4	23	
ひなた境						1	8			1	8	
道上		2	20			1	16			4	6	
かはらけ田		1	22				24			2	16	
道下						1	23			1	23	
清水田						3	9			3	9	
山こし	1	9	23			4	24		2	4	17	
沢田						3	15			3	15	
家うら						4	7			4	7	
茶磨山						7	3			7	3	
合 計	4	6	18		6	4	16		1	1	1	4

写「茶磨山延宝八年未新田地帳括(田方)」による(松井政春蔵)

4町4反余で若干多い)に対し山畠が2町6反余で、その半分を占めている。畠全体の筆数は135筆で1筆あたり約3畝歩となり、水田より大型である。屋敷の総合計は6畝15歩、その筆数は7筆なので戸数は7軒とみられ、1軒平均屋敷面積は約27坪となり甚だ狭い。耕地名については、現在も使われているものは、まんく八石・清水田・茶磨山・東羅のみである(伊藤基談)。

延宝8年より33年後の正徳3年(1713)茶磨山村と野村上両村合同で中野御役所に差出した明細帳(小林頼利筆写)によると、田方は1町1反17歩で延宝8年と同じと言って良いが、畠方は5町5反5畝18歩で1町歩以上も増加している。このことは畠地は山畠が多いので反当収量が少なく、広い面積を焼畑農法的に耕作したものとも推考されるものである。

### 3. 六十六部供養塔

松井辰明星敷内西脇の旧道端に、天保4年(1833)建立の六十六部供養塔(高さ129cm)が立っている。碑面には次のような文字が刻されている。

天下和順

◎奉納大乘妙典日本遍國供養

日月清明

願主 国右衛門

天保四天七月立之

同家の故きん氏(明治34年生)は、この碑について次のように語られた。

「仏さんを背負って歩いて来た男のロクボーさんが、あんべ悪



写真3 日本遍國供養塔

せり沢新田、荒井横手新田、夏川新田、高坂新田、地蔵窪村の諸村と共にその村名が記されている。しかしこれ以後今のところ、まんく王石新田地名は文献上では発見されていないが、通称は馬鍔石と呼ばれていたのである。

### 2. 農業

延宝8年の「水内郡野村上村内茶磨山未新田地帳括御検地」(松井政春家蔵)により、田方と畠方を耕地別等級別に集計したのが次の第1・2表である。これについて若干考察する。

田方總反別は1町1反余(検地帳末尾の合計も1町1反余で同じ)の中、下下田が半分以上である。総筆数は57筆で、一筆当たり平均約2畝歩の小型の水田である。畠方は總反別4町1反余(検地帳末尾の合計

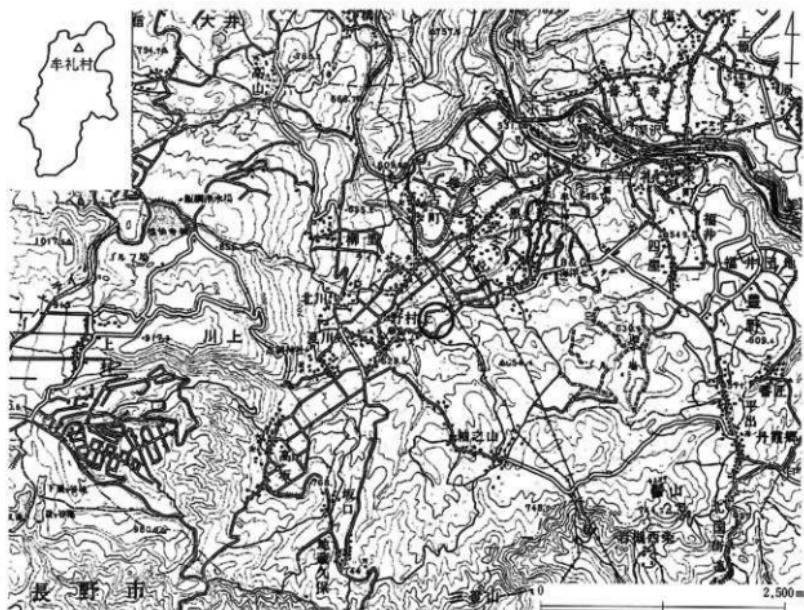
第2表 延宝八年茶磨山新田畠方反別

等級 耕地	中 畠				下 畠				下 下 畠				山 畠				里 畠				合 計					
	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩		
田 島										3	18													3 18		
道 下					9	28			1	5	22											2	5	20		
ひなた境										1	18													1 18		
前 坂										9	6			7	26								1	7	2	
平										1	2	18											1	2	18	
やっこばた										1	3	22			2	6							1	5	28	
くわの木ばた										1	1	1			1	17							1	2	18	
せきばた											5	21			9	18							1	5	9	
志水ばた														1	4	24							1	4	24	
東原境														3	4	22							3	4	22	
東くば境														3	2	6							3	2	6	
せきそへ														2	1	18							2	1	18	
久保田														2	0	19							2	0	19	
丸 山														2	5	2									2	
境 下											10														10	
山 城						5	6			1	7			3	4									9	17	
山越くろ						1	2	5						1	4									1	3	9
道 ば た														2	4	21								2	4	21
家 う ら							2	1						1	22									3	23	
屋 敷 添		8	10		6	24																	1	5	4	
道 上					9	16																	9	16		
くねそへ								2	10														2	10		
川 ば た							1	28															1	28		
山 ノ 峠								5	26					6	26							1	2	22		
せき上						2	4								26								3	0		
横 烟														8	2								8	2		
峰まわり														6	10								1	6	10	
西 ノ 峰														4	10								4	10		
西さかり														9	0								9	0		
ももの木畠								3	27					2	0	2							2	3	29	
屋 数																6	15						6	15		
合 計	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩	町	反	畝	歩		
	8	10			4	7	24		8	8	24		2	6	6	15	6	15	4	1	7	28				

写「茶磨山延宝八年未新田畠地帳話(雄方)」による(松井政春蔵)

くて休ませてくれと言って来て居すわりになった。丁度その頃おやじさんが子供三人残して死んでいなかつたので、本家(松井政春家)に頼んで畠仕事をすけてもらつた。ロクボーさんが死ぬ前に巻番の中からお金を出して、「この金で俺が死んだら碑を立ててくれ、文句は紙に書いてある。人通りのある所に立ってくれ」と言つて死んだ。それで石屋に頼んで碑を立つたのだ。明治の少し前のことだし」

岡山市ノートルダム清心女子大学の小鳴博己先生の著書『六十六部に関する二・三の覚書』には、「六十六部とは日本全国の六十六カ国(郡)の窮地を巡り歩き大乗妙法華經を奉納してゆくという巡礼者のことである。略して六部といふ。六部の供養塔には大抵、天下和順・日月清明・日本遍國の文字が刻されていて、国土意識がともなっている」と書かれている。したがつて前述のきん氏の言われたロクボーとは、まさしくこの六部のことである。牟礼三水地区でロクボーの碑が10基現存している中で、茶磨山集落に残つたこのような悲話のこもつた六部碑は稀である。



第4図 調査地位置図 (1 : 50,000)



第5図 調査地周辺の地形 (1 : 5,000)

## 第3章 調査結果

### 第1節 A区遺構・遺物

#### A区基本土層

1層	果樹園耕作土	20cm
2層	黒色土	30cm
3層	黄色粘土	60cm
4層	白色粘土	

遺構は表土（果樹園耕作土）下の黒色の土層から検出されるが遺物も縄文土器から現代の陶器まで混合して出土し、判断しにくい状態である。この層は部分的に残しながらすでに耕作などにより破壊されているが、覆土を見ながら近現代の遺構と区別した。検出された土坑は遺物を含んでいないため時代を決定づけることは難しいが、覆土が純粋な黒色土である場合と浅い掘りでしかも覆土が表土に粘土などが混ったようなものとに分けられる。

#### 土坑（SK1・SK4・SK5・SK8）

SK4以外の遺構は断面図の作成ができなかったために、概ねの観察になっているが安定した地層であることと、縄文の遺物が含まれていた土であること、また検出面においても他の時代の土器（土師器、須恵器など）がないこと等から、すくなくとも近現代にできたものではないと考え、時代は縄文と推定する。

SK1 長径140cm短径95cm深さ40cm、底部は中央部分からさらに掘り込まれている。

覆土は薄い黒色土層の下に黒褐色土が堆積している。遺物はない。

SK4 60cm四方の深さ10cm。覆土は黒色土のみで、遺物はない。

SK5 長径340cm短径80cmの最も深いところで60cmを計測する。覆土は黒色土のみ。

SK8 長径180cm短径80cm最も深いところで30cmを計測する。覆土は黒色土のみ。

#### 土坑（SK3、SK6、SK7）

SK3、SK6、SK7は10cm内外の浅い落ち込みで覆土も黄色粘土粒や塊が含まれ、遺物はなし。時代は不明。

#### 溝状遺構（SD1、SD2）

SD1は幅100cmから広い箇所は150cm、深さ10cmほどであり、一部分に特に深い落ち込みがあり、付近に焼土があった。磨石、小型石斧が出土している。SD2は幅40cm、深さ数cm、南北に自然地形のまま土砂が流れたという状態である。

#### 集石遺構

A区東側に石の集まりが検出された。石の大きさは10cmから40cmぐらいまで、部分的には偏平な角礫をいかにも意図的に並べたかのように見えるところがあるが、全体では規則性はなく、集めた石というより集まつた石という状況である。またケルン状の重なりのようないい意図的なものはない。なかには幅100cmを超える、土に埋まっている部分を観察できないような石もある。また観察できた部分だけでも100cm×120cm×50cmの巨石ともいえる石が出ている。地山直上の集石である。付近から石皿が出土しているが、地山より30cmの高さの出土である。

#### ロームマウンド

直径3m、溝の深さ50cm。集石の際に検出される。

#### 石器（第12図）

ほとんどが検出面からの出土であり、遺構に伴ったものは2点のみである。1～4は検出面から出土の石器である。石質は1はチャート、2は黒曜石、3・4は安山岩である。7、8は検出面出土のスクレイバーで、石質は7は不明、8はチャートである。9はチャートで作られたドリルであり遺跡東側での表面採集による。10、11は溝址SD1より出土。10は白色の小型磨製石斧である。白色で断面は一見骨と見間違うようであるが軟玉である。11は磨石で安山岩である。12、13はA区出土で安山岩の石皿である。12は全面が深く窪んでいる。裏面には円形の数個の浅い溝があり、平である。13は割れていて一部分のみの残りであるが、12ほどの使用痕は見られない。14、15は安山岩で検出面から出土している。14は磨痕、敲痕、15は磨痕が認められる。16は砾石で2面が使用されている。砂岩である。頁岩の石核が1点出土している。

### 第2節 B区遺構・遺物

#### B区基本土層

1層	表土	20cm
2層	黄褐色土	20cm
3層	黒色土（漆黒）	20cm
4層	黒色土（硬め、晚期）	40cm
5層	黒色土（漆黒、前期）	35cm
6層	褐色土（締まっている）	10cm
7層	褐色土（上層より軟）	20cm
8層	黄色粘土	

遺構として確認できたのは土坑1基のみであった。

#### 土坑（SK1）

長径72cm、短径30cm、深さ60cmを計る。底部の中央付近に10cmの小穴があった。覆土の断面観察はできなかったが、この小穴を杭の穴とし、狩り用の落とし穴としてつくられたと考えられる。遺物の出土はなかった。

B区の西側半分以上は最近まで水田として耕作されており、その20cmほどの耕作土、10cmほどの床土の下層は黄色粘土混じりの黒褐色土、黄色粘土、人力では動かせない大きな石が無造作に重なり、遺物包含層はすでに破壊されているものと判断し、調査はB区東隅部分のみとした。表土下3層より厚い黒色土層となり遺構検出は難しくなる。遺物は表土下2層より、縄文土器、土師器、ごくわずかの須恵器が出土した。以下黒色土を3、4、5層と分層した。4層からは晚期土器、5層からは前期土器が出土している。小破片が多く実測可能だった土器は縄文土器5点、土師器3点のみであった。他の破片は拓影図として示した。

#### 土器（第11図）

1～5は縄文時代晚期の土器であり、佐野式土器に属す。6・7・8は平安時代9世紀末から10世紀の特徴をもつ土師器である。

1、口縁部と底部を欠いている。体部の上部に最大径8.6cmをもち、現存している部分の高さは約4cmを計る。小型の浅鉢であり、完型にすると5cmほどになると思われる。隆線に縄文を施す。胎土は白く、

- 他の破片より緻密であるがつくりは粗雑である。小破片である。
- 2、小型の壺で胴部の径6.2cm。縄文の文様帯を肩部にもつ。文様帯の一部が剥離しているが突起が剥がれたものであろうか。1/5の残存である。
- 3、径8.3、高さ7.7cmの樽のように膨らんだ筒部をもち、裾が広がる高环脚部状の形をした器台と考えられる。筒部には中位3箇所に円形の透かしがある。裾部にも三角形の透かしの一部が残っている。文様帯は撚糸文を施し、入り組み文で構成される。胎土は粗く、大きな砂粒が多く含む。整形は粗雑で研磨はされていない。
- 4、口径21.8cmの浅鉢。口縁部は肥厚しているが、体部の器肉は極端に薄い。胎土は粗く、摩耗しているので粗雑な感をうける。外面には赤色塗彩の痕跡がある。小破片である。
- 5、口径35.5cmの深鉢。口縁部は外方向へ少し開き、3本の沈線が巡る。胎土は粗く、多くの大きめの砂粒を含む。他の破片と比較すると丁寧に整形されているようである。研磨は一応されている。補修孔がひとつだけ残る小破片である。
- 6、口径13.3cm、器高4cmの壺。内面が黒色で研磨されている。底部および底部周囲は回転削りにより整えられている。体部はふくらみを持って内湾ぎみに伸びている。胎土は粗い。1/3の残存である。
- 7・8 接合はできなかったが、蓋で胎土、様相などから同一個体と考えられる。口径24cm、最大径胴部上位23.5cmを計る。口縁から胴部上半はロクロ、以下は平行タクキ、削りで整形されている。内面には指の押圧痕が残っている。胎土は粗い。

#### 土製耳飾（第17図）

1は直径3.5cm、中央孔の縁に列点をめぐらしている。ほぼ完形であり、赤色塗彩の痕跡が微妙に刻み目に残っている。2は直径2.5cm、縁に列点をめぐらし、凸帯を2条つくっている。中央に孔をつくっている。完形品である。3は小さな破片なので、大きさをとらえにくく復元実測すると直径が10cmにもなってしまう。大きなものであることはまちがいないが正確な値であるとは言い切れない。また文様があるのかどうかなど全体の様相は、表面を発掘用具で削ってしまい不明である。いずれも黒色土層の晩期の包含層から出土している。

#### 石器（第12図）

石器2点が出土しており、石材は5は黒曜石、6は頁岩である。

#### 古鏡（第18図）

1点出土。江戸時代半ば以降に鋳造された寛永通宝（新寛永）。

#### 縄文土器拓影（第14・15・16図）

B区で出土した縄文土器のうち実測不可能な小破片を拓影図として示した。大多数が検出面としての出土である中で、黒色土層上位での出土もある。1～5は沈線のみである。1・2・4は太い沈線が口縁部にあり晚期特有の深鉢であるが、3・5はそれらとは様子が異なる。3は細い線が4本あり擦り減っていることもあり器形がわからない。5の沈線は頸部にあり、沈線というより、階段状の浅い線である。6～14までは細い縄文帯を持ち、厚さも薄く深鉢にはならないと思われる。15・16は沈線のみで15は大型、16は厚さも薄く小型である。17・18と41は同一の個体とおもわれる。浅鉢であり、18と41には赤色塗彩の痕跡が多く認められる。21は薄く小型であり、細い隆帯には列点を配している。赤色塗彩の痕跡がある。22は口縁部であり胎土はきめ細かく、器形はこの破片からとらえにくいか浅鉢になると思われる。26は口唇部に文様を持つ浅鉢である。27は内側に肥厚した口縁部であり、突起がある。28・29は前期の土器である。31はボタン状突起

である。以上は検出面としての出土である。

32以降は黒色土としての出土であるが層位に大差はない。32～35は沈線のみの深鉢である。40は浅鉢であるが、焼け歪みなのか稍円の鉢なのか器形をとらえにくい。44・45は縄文の文様帶と沈線が込み入った小型の浅鉢である。48・49は刺突文を施した前期土器である。48は口縁部であり、突起がある。

## 第4章 まとめ

茶磨山遺跡の調査は今回で2回目である。1回目は県営園場整備事業に伴い昭和54年（1979年）に行われた。その結果は報告書『明專寺・茶白山遺跡』として報告されている。

はじめにこの報告書の冒頭にも記し繰り返しとなるが、従来より遺跡名は「茶白山」の漢字を使用してきた。これに対し遺跡所在地の小字名が「茶磨山」であり、この地域の人達はずっとこの「茶磨山」を使用している。それなのになぜ遺跡名に異なる字を使用するのか疑問の声も多かった。時を同じくして教育委員会では遺跡詳細分布調査として村内の遺跡見直しを行っていたので、これを機に「茶磨山遺跡」と改名したものである。

1回目の調査は茶磨山の北東側斜面を行い、北側の遺跡範囲は推定できる。その意味では今回の調査場所は反対の南側なので範囲を把握するのには好都合の場所であった。

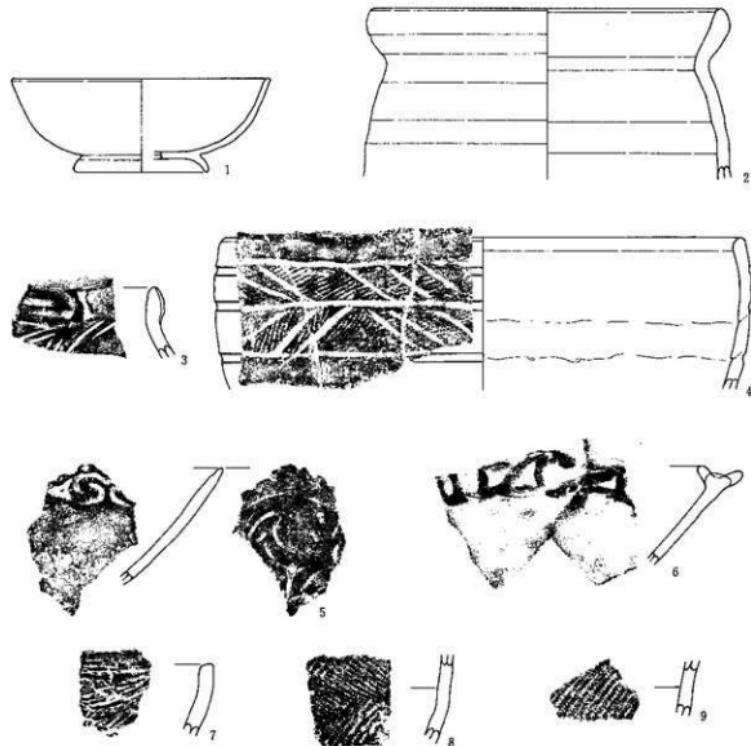


第6図 遺跡地形図 (1 : 2,500)

A地区はこれまで果樹園として耕作されていた。遺物は時代も特定できないような縄文の極小破片と近現代の陶器が混合して出土したがその量もごくわずかであった。単一の時代の遺物包含層は無かった。遺構も同じ層位からの検出であり、ほとんど遺物を伴わないので特定がむずかしいが、覆土の違いから判断した。その結果として、現在の集落の中心となる茶磨山の西南には縄文の土坑と近現代と考えられる土坑が検出されたもののその間の生活の痕跡は見つからなかった。

B地区は水田造成時に壊されたらしく遺構は検出はできなかった。残された部分も黒色土の厚い堆積で遺構の検出は難しかった。遺物は縄文晩期前葉の佐野式土器と平安時代9世紀の土師器を中心に出土しており、また縄文前期土器と後期らしき土器も少量混ざっている。

第7図1～6はB区の北隣接地を改変した時に出土したという土器で、矢野恒雄氏が採集された。5には明瞭な赤色塗彩の痕跡が認められる。胎土は白く搬入品と考えられる。文様は亀ヶ岡式土器の特徴を持つ。6は口唇が隆線と縄文で施文された浅鉢であり、いずれも縄文晩期佐野式土器である。1は高台付き环であるが高台の高さや形など灰釉の影響をうけたと考えられる形態の环であり、器面の整形は丁寧であり、内外



第7図 茶磨山の東側標より出土 (1 : 3)

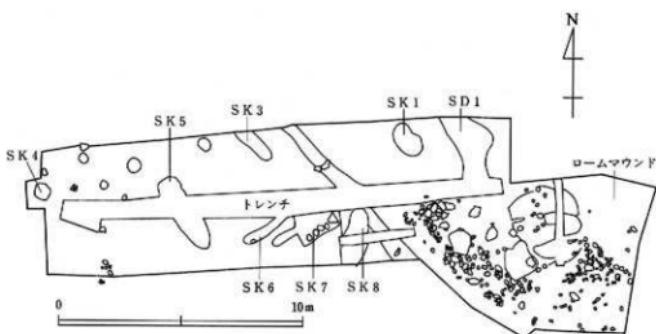
面ともよく磨かれている。器内は薄く、そのせいか焼け歪みは大きい。2はロクロ整形による砲弾型底部の甕である。平安時代9世紀末から10世紀前半の土師器であり、その破片の大きさやまとまりから、採集地点住居址があつたのであろうと思われる。

また、その地点のさらに東側からは7（諸磯B式土器）、8・9（羽状縄文）の縄文前期土器を含む多量の縄文土器が松井政春氏により採集されている。

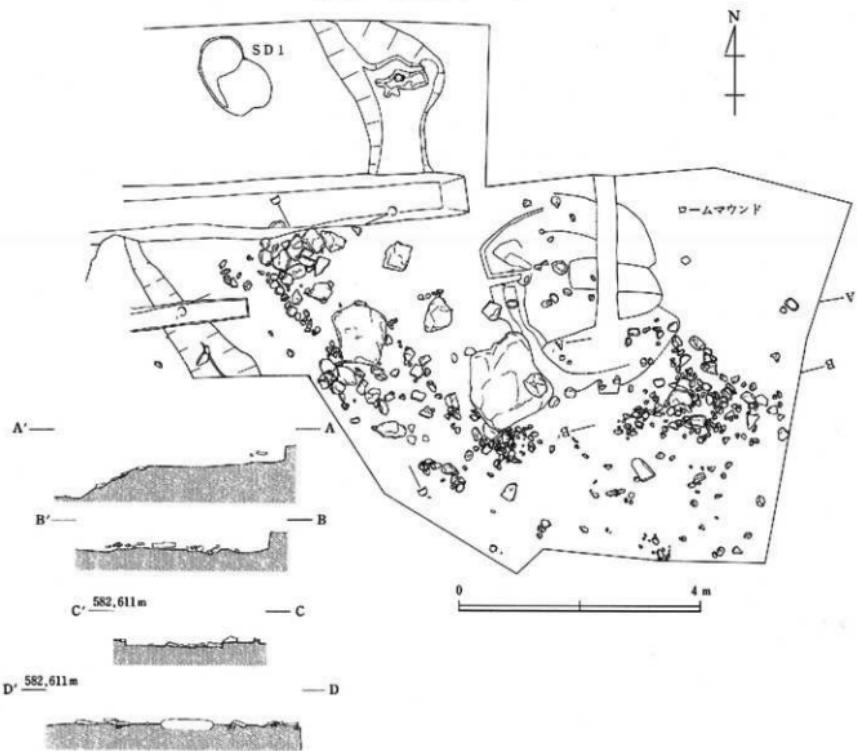
以上のことを考えあわせると、茶磨山遺跡は、膨大な量の縄文晩期の佐野式土器と石器が出土した1回目の調査により、縄文晩期単独遺跡のように考えてきたが、晩期に隆盛期があることはまちがいないにせよ、今回で縄文前期、後期、また平安時代9～10世紀は集落遺跡と、いくつかの時代の複合遺跡であることがわかった。ただし遺物は集められてもその生活址についてはいずれの時代も不明であって、解明は今後の大きな課題である。

#### 参考文献

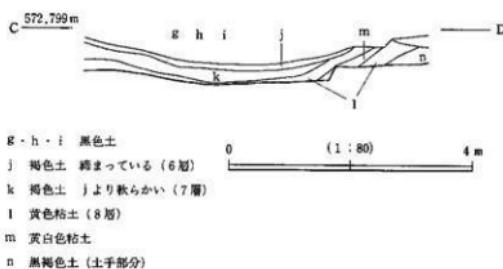
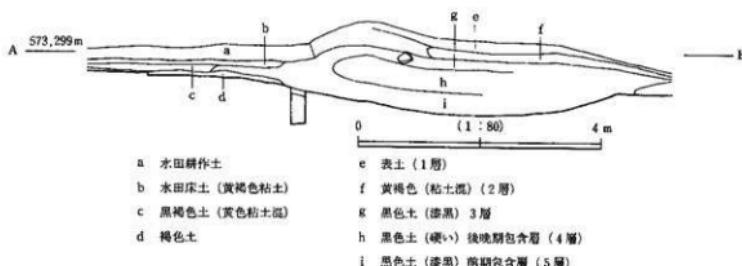
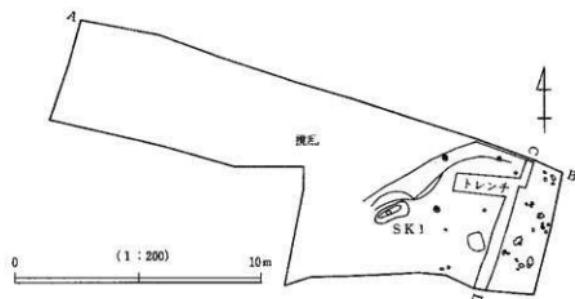
- 1.『長野県史』考古資料編
- 2.『長野県牛札村誌』上（自然・原始・古代・中世・近世）1997
- 3.『佐野』長野県考古学会研究報告書3 1967.11
- 4.『佐野遺跡』（第8次）1989.3 山ノ内町教育委員会
- 5.『明專寺・茶臼山報告書』1980 牛札村教育委員会
- 6.『前田遺跡 長野県牛札村緊急発掘調査報告書』1981 牛札村教育委員会
- 7.『平出遺跡群発掘調査報告書』1992 牛札村教育委員会
- 8.『宮崎遺跡』長野市の埋蔵文化財二十八集 長野市教育委員会
- 9.『石器時代』石器時代文化研究会 昭和44年6月
- 10.『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16』長野県埋蔵文化財センター
- 11.『縄文土器大観4』小学館
- 12.『日本の原始美術 縄文土器II』佐原真 講談社
- 13.『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 吉田川西遺跡』1989



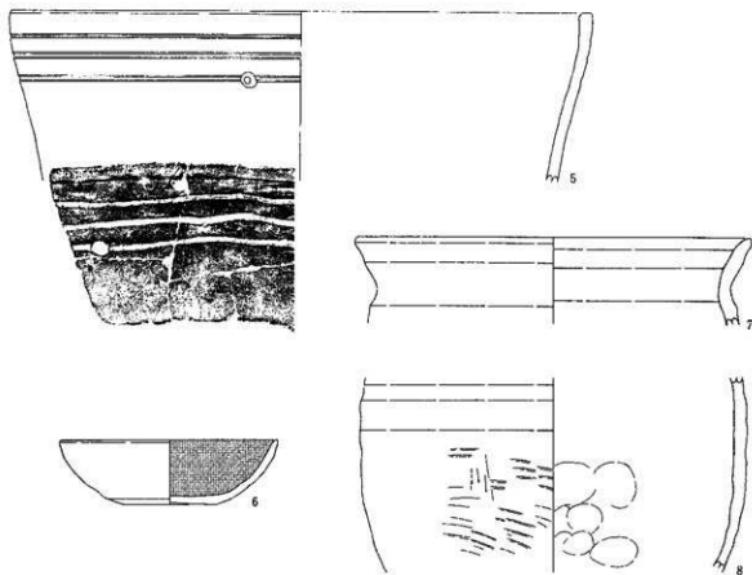
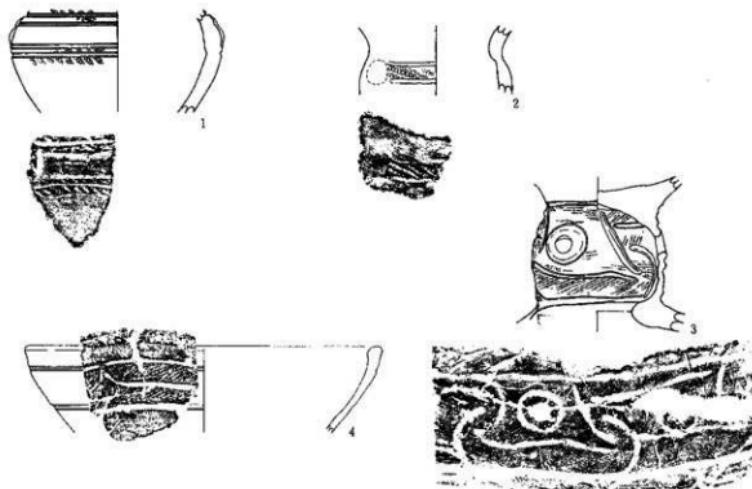
第8図 A区全体図 (1 : 200)



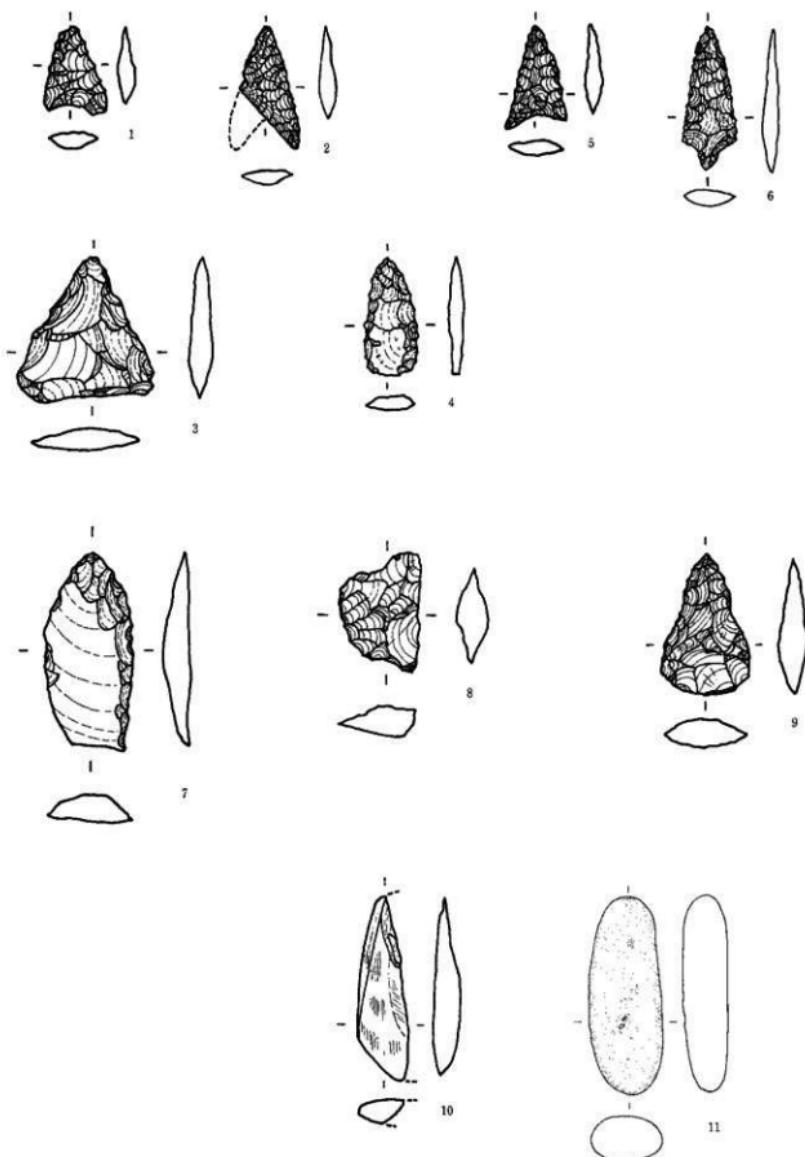
第9図 集石造構査測図 (1 : 80)



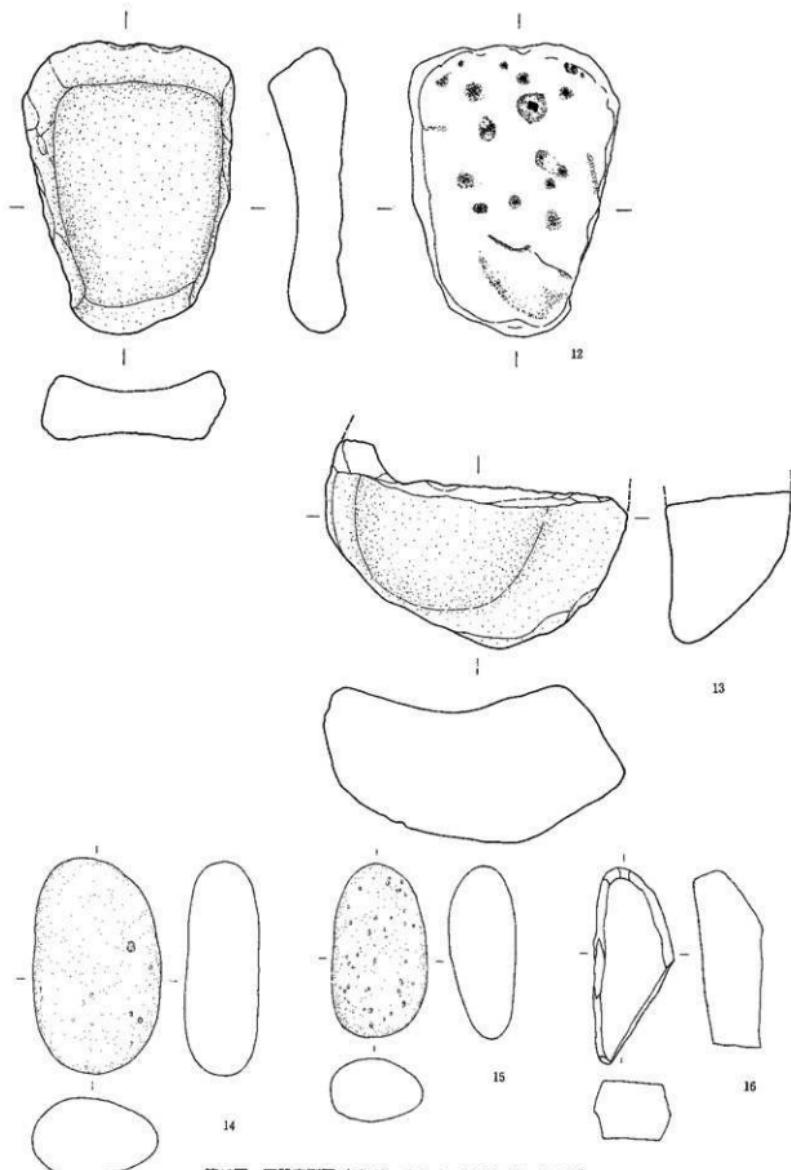
第10図 B区全体図



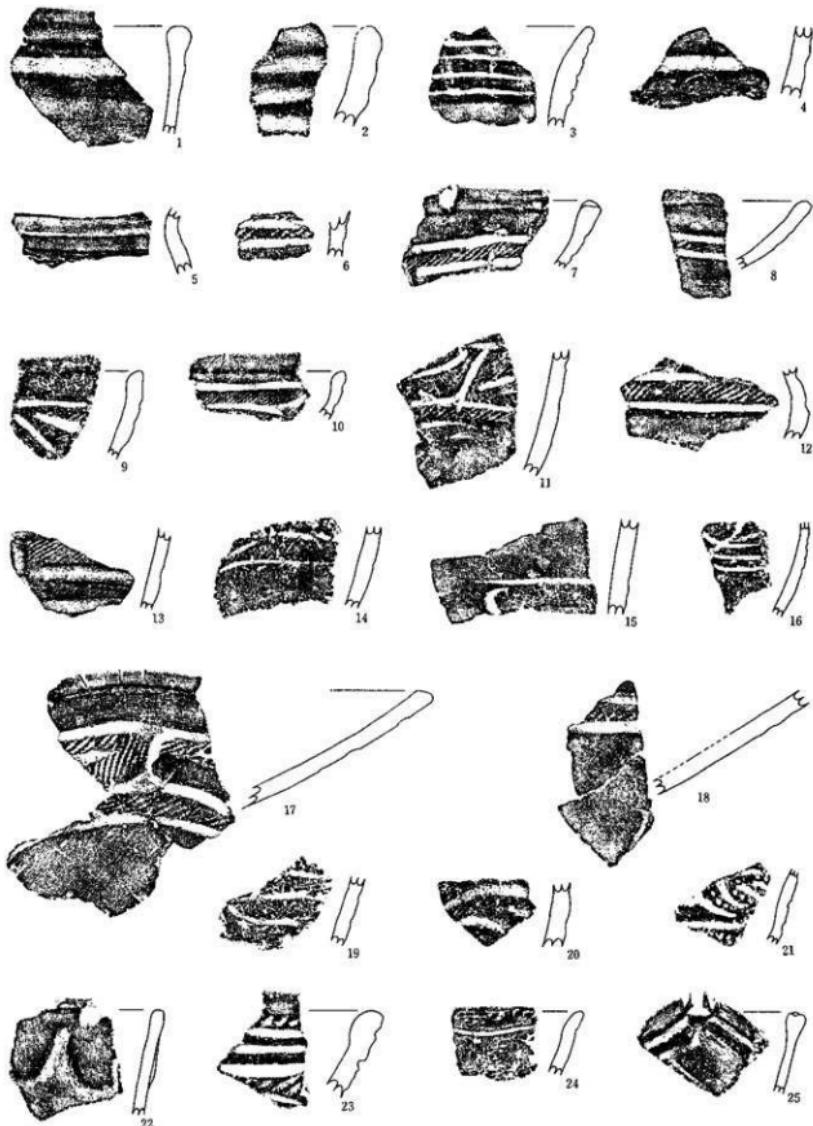
第11図 B区出土土器 (1・2 1:2、3~8 1:3)



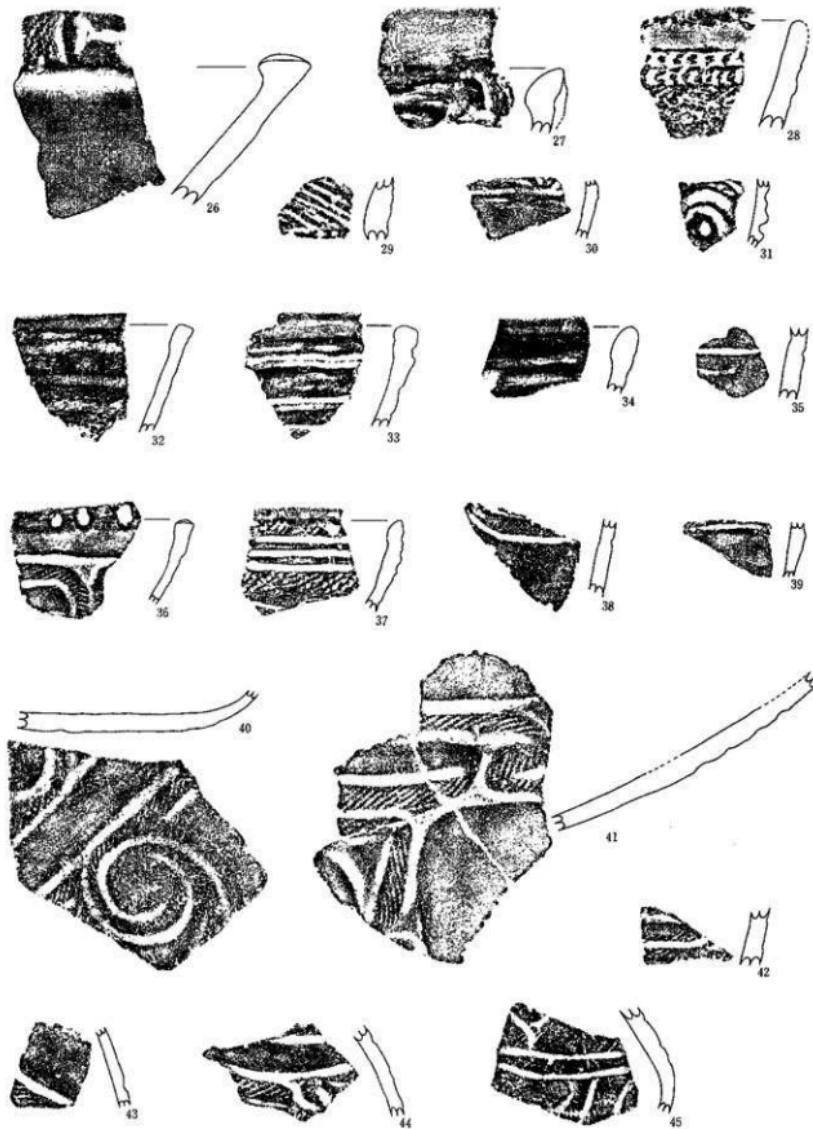
第12図 石器実測図 (1~10 1:1, 11 1:3)



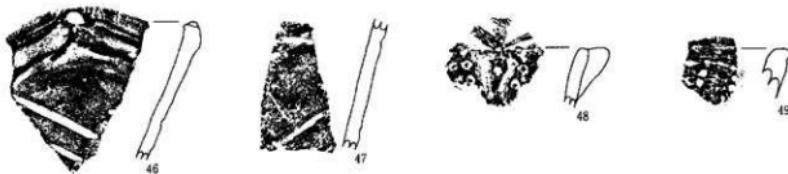
第13図 石器実測図 (12・13 1:4、14・15・16 1:3)



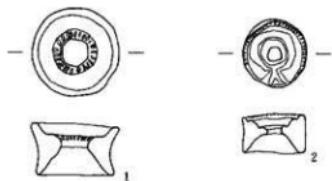
第14図 土器拓影 (1 : 2)



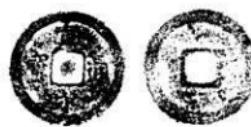
第15図 土器拓影 (1 : 2)



第16図 土器拓影 (1 : 2)



第17図 B区出土 土製耳飾 (1 : 2)



第18図 B区出土 宽永通宝 (1 : 1)

写真図版 1

南東より（遠景）



南東より



西方より



写真図版 2



A区遺構検出作業



牟礼西小学校 5年生も参加



同上

A区全景



SK 1



SK 5



写真図版 4



A区集石 東より



A区集石 西より



ロームマウンド

写真図版 5

B区全景



SK 1



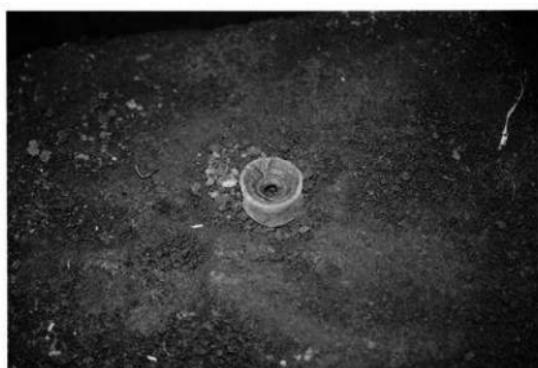
遺物出土状況



写真図版 6



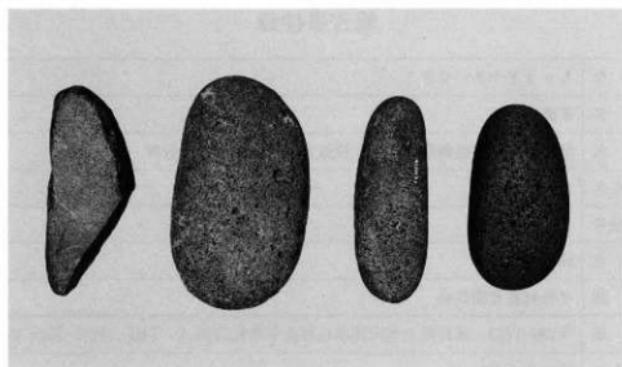
器 台



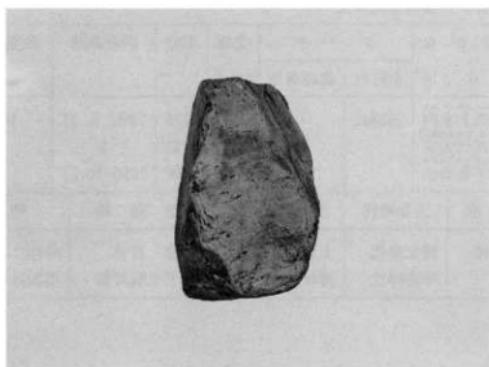
土製耳飾



同 上



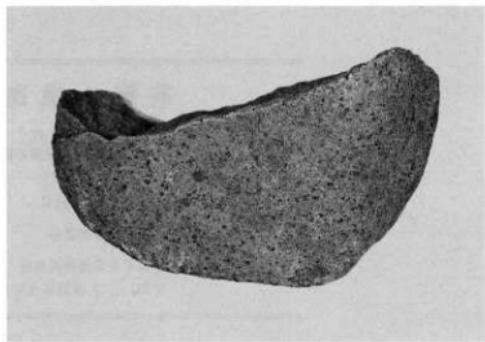
磨 石



石 核



石 盆



石 盆

## 報告書抄録

ふりがな	ちゃうすやまいせき						
書名	茶磨山遺跡						
副書名	緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	横山かよ子						
編集機関	牟礼村教育委員会						
所在地	〒389-1293 長野県上水内郡牟礼村大字牟礼2795-1 TEL (026) 253-2511						
発行年月日	2000年3月31日						
印刷製本	ほおずき書籍株式会社						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°	'	m <sup>2</sup>	
茶磨山遺跡	長野県上水内郡牟礼村大字川上字茶磨山	205842		36° 44' 00"	138° 13' 08"	1996.8.31 1996.10.21	180m <sup>2</sup> 村道整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
茶磨山遺跡	散布地	縄文時代 平安時代	土坑 溝状遺構	縄文土器・石器 須恵器・土製耳飾		耕作による破壊のため、遺物は混在	

## 茶磨山遺跡

——緊急地方道路整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書——

発行日 平成12年3月31日

編集発行 牟礼村教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社  
〒381-0012 長野県長野市柳原2133-5

